

ガザ＝ストロフーパレスチナの吟^{うた}

パレスチナ・ドキュメンタリー映画

「撮影から10年
以上経ってもこ
の映画が今日的
意義を持つとは
思わなかった」
監督談



GAZA STROPHE PALESTINE

un film documentaire de
SAMIR ABDALLAH & KHÉRIDINE MABROUK



1948年から、ずっとカタストロフ^{大惨事}を生きてきた

受賞歴 エル・アルド賞 アル・アルド映画祭 2011年 / アハメド・アッティア賞 第12回 MEDIMED / フランスTVグランプリ 第15回地中海国際ドキュメンタリー・ルボルタージュ映画祭
審査員賞 第21回ベサック国際歴史映画祭ドキュメンタリー部門 / 若手ジャーナリスト審査員賞 第21回ベサック国際歴史映画祭ドキュメンタリー部門

2025年

7月12日
(土)

- ① 9:30 開場
10:00 上映開始
- ② 13:30 開場
14:00 上映開始
- ③ 18:30 開場
19:00 上映開始

場所: LAGセンター
(大阪市城東区蒲生1-6-21)
(地図は裏)

料金

◆ 一般

500円

◆ 高校生以下

300円

ボランティアスタッフ募集

ピーター・バラカン

ブロードキャスター

完全に人道を逸してしまっているイスラエル軍の殺戮はやはりジェノサイドと呼ばざるを得ません。

それでもパレスチナの人たちは強く、想像を絶する悲惨な状況の中でも、

死んでも故郷を離れないと話す人の姿に感激しました。

安田菜津紀

メディアNPO Dialogue for People副代表／フォトジャーナリスト

「すべては2023年10月7日にはじまった」のでは断じてない。

その証拠が、この映画にある。ありすぎるほど、ある。ただ世界が「見なかった」だけだ。



【イントロダクション】

2023年10月中旬、イスラエルによるガザ地区への軍事攻撃開始から10日後、監督のケリディン・マブルークからショートメッセージが届いた。「撮影から10年以上経ってもこの映画が今日的意義を持つとは思わなかった」と。

パレスチナの人々は常に西洋の視点から描かれ死亡者数という数に還元されてきたが、一人一人の顔を描き世界に伝えることがこの作品の第一の目的だったと振り返り、「パレスチナには世界の問題が凝縮されている」と強調する。

本作はガザの地で生きる人々の姿を丁寧に描きながら、同時にパレスチナ問題の背景にある西洋諸国による二重基準、構造的暴力について浮かび上がらせる。

多くの人々が、これは明らかにジェノサイドだ、と声を上げる悲惨な状況が続く中(2024年8月現在)、人々の姿と歴史を知ることから変わる可能性を問いかける。

【あらすじ】

2008年12月末から2009年1月にかけてイスラエルによるガザの大規模侵攻が勃発。監督のサミール・アブダラとケリディン・マブルークは、停戦の翌日にパレスチナ人権センターの調査員と共にガザに入る。爆撃で両親兄弟を失った子ども、目の前で家族を銃撃された男性、土地を奪われ逃げてきた人々…「顔を持つ」一人一人の証言が記録されるとともに、パレスチナを代表する詩人、マフムード・ダルウィーシュの詩が引用され、ガザの人々が生きてきた歴史と記憶が呼び起こされる。

<地図> LAGセンター

(JR・京阪・メトロ「京橋駅」から徒歩10分)



ご予約はこちらまで

ガザ=ストロフ パレスチナの吟

ZENKO関西実行委員会

090-8162-3004 川島

HP <https://zenko-peace.com/>

監督・撮影: サミール・アブダラ、ケリディン・マブルーク

2011年 / 92分 / フランス・パレスチナ合作

配給・宣伝 Shkran

HP <https://lime010328.studio.site/>

ガザ=ストロフ Xアカウント @Gaza_strophe